
無感情とセックス

三沢かも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無感情とセックス

【Nコード】

N2814E

【作者名】

三沢かも

【あらすじ】

僕は今日も無感情に女の子を抱いた。相手はそれ以上もそれ以下もない関係の女の子。抱いた後、僕は決まってむなしい思いにとらわれる。

1話目・ほろ苦い思い出

今日も無感情に女の子を抱く。

僕には今、そういう関係の女の子が1人いる。そしてその人数は常に移り変わる。

それ以上でもそれ以下でもない関係。ただ抱き合う。それだけの関係。

ある意味、とても純粋な関係。

関係は需要と供給が安定している間だけ続く。求めなくなれば二人の間には意味というものがなくなる。意味がなくなれば相手のことも忘れる。

抱くということが目的だから、マナーも何も無い。楽しむわけでもなく、まして楽しませようなんて思わない。

今日も僕はいつもの手順でことを終わらせた。

終わったあとはきまって相手の女の子が鬱陶しくなる。

その日も僕はベッドの上に残っていた女の子の下着を床に蹴落とし、相手に背を向けると目を閉じて眠った。

僕は19歳になった。もうすぐ20歳になる。

これまでに5人の女の子と付き合い、そのうち4人と寝た。

ベランダに出て煙草を吸うと、その女の子たちのことを思い出すことがある。

それらは決まってほろ苦い思い出で、僕の胸をすこし傷つける。

初めて寝た女の子は近くの女子高の子だった。

文化祭で知り合い、そのまま中夜祭にも出ずに駅前のカラオケボックスへ行った。

お互い声を一言も発さないまま、僕は不器用な手つきで彼女の体を抱き、不器用に体を動かした。

彼女も不器用に身をよじらせ、固い声を出した。

不思議なことに、僕は隣のブースでアバのチキチータが流れていたこと以外、鮮明な記憶に残っていない。

その女の子とは2か月付き合い、その間に僕らは4度寝た。別れる時、僕はその女の子に向かって、

「楽しかったよ」

と言った。

その女の子は僕のほほを思いっきり平手で打った。

あの頃から僕は成長したのだろうか。

僕はたばこの煙をゆっくり吸いながら、自分に尋ねてみる。

決まって出る結論は、見かけは成長していても僕自身の本質的な部分はなにも変わっていないということだ。

僕はなぜ女の子を抱くんだだろうか。

再び考える。

確認。

そういうのは偽善だろうか。

本能。

あるいはいちばん正しいのかもしれない。

結果。

それは嘘だ。

2 話目・言い訳の連鎖

19歳の恋愛と初めて彼女ができた14歳の恋愛。何が違うのだろうか。

僕は僕の生きてきた19年間で、少なくともふたつのことを学んだ。

ひとつは、どんなに最高の彼女と思えても、関係には必ず終りが来るといふこと。

そしてもう一つは、それでもやはり恋をしてしまうといふことだ。

そのことを知っているといふことは、ある意味強みであり、またある意味とても悲しいことだと思う。

「飽きたんだ」

僕は今まで何度もそう言い訳をして女の子たちと別れてきた。

でも実際は違う。

僕が、一度の倦怠期も乗り切られずに女の子と別れてしまうのは、僕に女の子をいつまでも引き付けておく魅力が足りなかったということ以外に理由がない。

なにかの飲み会だったと思う。ある友達が、

「倦怠期ってなに？」

と僕に聞いた。僕は酔っていたというのもあり、返事をしなかった。僕のとなりにいた友達が代わりに説明すると、はじめに僕に倦怠期の意味を聞いた友達は、平然とした声で、

「そんなの、オレはなっただことないわ」

と笑って言った。

僕はその時当然のようにその友達に殴りかかった。

僕はそうしていつの間にか女の子に対して冷やかな感情になり、それでも抑えられない性欲との均衡点として無感情なセックスをするようになった。

3 話目：物語の始まりとリリ

自己紹介。

僕は都内の大学に通う、とある地方都市から上京してきた大学2年生だ。

僕の大学生活は、テレビドラマであこがれたような世界とは程遠かった。

たとえば、常に一緒に行動する男女仲の良いグループなんてそうやたらめつたらでできるものではなく、まして同じ授業を受けるかわいい女の子に声をかけられるほど開放的な雰囲気などまわりにはどこにもなかった。

7

僕の大学生活は、あくまでも現実的なものだった。

家に帰って食べるものと言えば、そのほとんどがは冷凍していたごはんとフランスパンで、友達との間で盛り上がる恋愛話のその多くは、とても昼間のキャンパスでは大きな声で言えないような稚拙で下等なものばかりだった。

それは、田舎の男子校と少しも変わらない。

学生生活の時の流れは早い。僕の大学生活最初の一年間は、なにを
していいのかわからないまま、あるいはなにをしたのか自分でもわ
からないまま、失望と後悔のみを残して過ぎ去った。

その中で唯一確かに言えることは、僕の恋愛には一つとして立派なものはないということだ。

今、大学2年生になった僕の家にはリリという女の子が時々訪れるようになった。

僕は都心からは半時間ほどの小さな駅の近くに、道路脇の苔のようなアパートを借りてひっそりと暮らしていた。

僕の住むアパートは、誰かが階段を上る音が階段とは反対側にある僕の部屋まで響くような薄鉄筋のぼろアパートで、壁にはきつと壁自身も白く光っていたことを遠い昔に忘れてしまったに違いないほど無残なほどに植物のツタがはいまわっている。

そんな僕のぼろアパートにリリはいつも決しておしゃれとは言えないような服装をしてやってきた。

もしかしたらリリという女の子が、もともとおしゃれ好きな女の子ではなかったのかもしれないなかつた。

そのどちらか分らないのは、僕とリリが僕の部屋以外で会うことなどないからだった。

リリと会うことの意味はひとつ、セックスをするということだ。

僕かりりのどちらかが「会いたい」と連絡し、僕の家に来て、寝る。たったそれだけの関係。わかりやすくいい。

僕は時々思う。

セックスは女の子の方が好きなのではないか、と。

なぜなら「会いたい」の連絡は僕とリリで半々だったからだ。

今日も僕はベッドの上で、無感情にリリを抱きながら、明後日提出のレポート課題についてぼんやりと考えていた。

9

リリと初めて言葉を交わしたのは、大学2年の春。

わかているのは僕よりは年が二つ上で、同じバイトをしているという事だけ。

あとは知らない。

もちろん別に知らなくてもいい。

知るといふことは、責任を負うといふことだからだ。

4話目：転がされる快感

その日の僕は、一言でいえばうちひしがれていた。

無意味な感情がからからと音を立てて空回りし、歩みを進める一歩一歩ごとが底なしの砂丘の上を歩くように先の見通しがたたない日だった。

それなのに今の僕にはその日うちひしがれていた僕になにがあったのか、まったく思い出せない。

僕はもしかすると僕自身にも無感情なのかもしれない。

いや、それにきつとどうせ大したことなどなかったに違いない。

元来、僕の人生に大したことなど起きたことなどない。

バイトは忙しければ忙しいだけ時がたつのも早い。

無意味な時は早く過ぎ去っていくべきだとも思う。

その日も僕は必要以上に仕事をこなそうとし、必要以上に時を早く進めようとした。

バイト後に仲間との飲み会が予定されていたが、僕は最初あまり乗

り気ではなかった。

やらなくてはならない課題もあったし、なによりも僕は疲れていた。

それでもなぜ飲み会へ参加したのかはわからない。
きつと断るのさえ億劫だったのだろう。

重い足取りを無理やりにすすめ、空っぽに近い財布の中身を見ない
ように、あるかどうかもわからない先輩の心遣いを期待して、僕は
飲み会に参加した。

「リリ」という人が働いているのは知っていた。

しかし曜日のシフトが異なり、一緒に働いたことはもちろん、言葉
を交えたことすらなかった。

居酒屋の座敷につくと、すでに何人かは飲み始めており、僕は居場
所もないまま一番の下座の席へ座った。
座るなり、

「鴨下君？」

と、声をかけられた。さらさらとした黒色のロングヘアにふれなが
ら、まだ足も崩していない僕に呼びかけたのがリリだった。

大体の出会いがそうであるように、僕とリリもはじめは当たり障り
のない会話から関係が始まった。

リリは僕より二つ上の大学4年生ということがわかった。

僕はぎこちない敬語で、彼女飽きさせないよう一生懸命話をし続けた。

リリは僕の大して面白くもない話に真剣に聴き耳を立て、しとやかな声で笑った。

飲み会の終盤には僕の敬語もだいぶ砕けたものになっていた。

今から思えば、僕はリリの手のひらの上でころころと回されていたにすぎなかった。

きまって後悔はあとからやってくる。

5 話目：コーヒーとキス

リリは僕の部屋に自然に上がった。

緊張している様子は全くない。

かといって余裕というわけでもなく、言うなら、行き慣れたアパレルショップに入るときのような顔をしていた。

僕がベランダに干してあった洗濯物を取り込んでいる間、リリは僕のベッドにちょこんと座り、僕の様子を見つめていた。

「コーヒーか何か飲みますか？」

と僕が聞くと、リリは

「豆の置いてある位置を教えてくださいたら私がいれるよ」

と言った。

僕は豆の入れてある位置をリリに教えた。

リリは僕の台所を使い、慣れた手つきでやかんを火にかけ、カップにインスタントコーヒーの粉を振り分けた。

手持無沙汰になってしまった僕は、仕方なく取り込んだ洗濯物を畳み始めた。

数分たって湯が沸き、リリは二つのコーヒーカップに注いだ。

リリは両手に持ったコーヒーの片方をクッションに座っている僕に渡し、自分はベッドに腰かけて一口すすった。

リリはコーヒーを一口すすると、何も言わずに手に持っていたカップを僕の前にあるテーブルに置き、立ち上がった。

僕は座ったままぼんやりと本棚のほうを眺めているリリに

「どうしたんですか？」

と聞いて、立ちあがった。

その時、突然リリは思いきり僕のことを抱きしめた。

「ちょっと」

という僕の言葉は、リリの唇が重なってくることでかき消された。リリの舌がゆっくりと僕の口の中を回り、舌を吸い上げるようにして一度離れた。

いつのまにか目を閉じていた僕が目を開くと、リリは僕のことを真正面から見つめていた。

幻惑、妖艶

そうという言葉がとても似合う目だな。と僕は心のどこかで思った。

リリは蛍光灯から垂れているスイッチを引き、部屋の電気を消した。

6 話目：億劫な猫

リリは2度スイッチをひき、蛍光灯の明かりが消え豆電球がひとつ光った。

僕はおもわずリリを抱きしめた。そして強く唇をリリの唇へ重ねた。コーヒーの香りが少しした。

リリは僕の体を両腕で腰からつつみ、その腕をなでるように上げて僕の首にからめた。

そして、かかとを浮かせてもう一度キスをした。

僕は何も言えなかった。言葉を発することがとても不埒なことに思えた。

左手でリリの短い髪をなで、右手に頬を乗せてキスをした。

リリも何も言わない。

僕らは再びお互いを強く抱きしめた。

リリは僕の口の中へ舌を入れ、上唇、下の表、裏と順に動かした。そして下唇を優しくくわえた。

僕は何もせず、リリのなされるがままにいた。

リリの唇はさらに僕の頬から耳、そして額へと回っていった。

僕はその間、膝の上に乗った猫のようになされるがまま、目をつぶり、感情をリリにすべて渡してしまっていた。

考えるということは、時に億劫になる。

難しいことはいい。

そう思わせてしまうような力強さが、その時のリリにはあった。

僕は今まで、女の子に抗われたことはなかった。

それは、心のどこかで自分に対する過剰意識につながっていたのかもしれない。

今の僕は、ただ単に抗うことが億劫になっているだけだ。

僕は今まで、僕の抱いてきた女の子たちのことと、その女の子たちとしたセックスのことをぼんやりと思いだした。

不思議なことに、そのほとんどのセックスで彼女たちは、今の僕と同じような顔をしていた。

僕はその想いを振り切るため、リリのことをベッドに押し倒した。

7話目：セックスと開票作業

下半身がうずく。心はうずかない。そんなセックス。

リリの顔は笑っていない。

僕も笑顔といえるような顔はしていなかった。

高校生のころ、生徒会委員長選挙の開票作業をしたことがあった。

リリの顔は、その時一緒に作業をしていた同級生の女の子と似た顔をしていた。

おそらく今の僕も同じ顔にも違いない。

セックスと選挙の開票作業。そんなふたつのものを結びつけてしま
うあたり、僕は人として壊れかけているのかもしれない。

無言の時間が続く。

聞こえるのは体と体のぶつかりあう音、リリの小さなあえぎ、そして
僕の控え目な息遣いだけだった。

それらの行為は作法の決まっている儀式のように、黙々と、そして
淡々と行われていった。

僕はある意味必死だった。

自分の欲を満たすために必死だったのだ。

汗が肌にしじむ。リリの汗も背中をつつすらと豆電球に反射させて光っていた。

僕は、中指と薬指で、リリの背中の中のラインを背骨に沿ってなでた。

やはり女の人の体ほどきれいなものはこの世にないと思う。
特に背中の中の曲線ラインは美しい。

ベッドのシートが湿る。

僕とリリは枕とともに床に転がり落ちた。そしてそこでもしばらく無言の行為は続いた。

僕はリリの上に乗りながら、リリの細い腕が爪を立てて枕をつかんでいるのを見つめていた。

枕はひしみ、リリの詰めは細く鋭かった。

その時、ふと気付くとリリは僕のことを見つめていた。

僕はあわてて目をそらした。

なぜだろうか。不思議だった。目を背ける理由がはじめはわからなかった。

けれどわかった。

リリが見つめているのは、僕ではないのだ。

そして、僕も抱いているのではリリの体だけで、心では抱いていないのだ。

無感情なセックス。

それは罪だ。でも罪悪感はない。

人はそういう矛盾をいくつ持っているんだろうか。
僕の今していることが道徳に反するとするならば、道徳に反したものは、どうやって償えばいいのだろうか。
誰も僕を裁いてくれない。

僕とリリは最後に小さな声をあげ、体をゆっくりと離れた。

8話目：ヘッドの脇のティッシュボックス

セックスが終わったあと、僕は決まって女の子の存在が鬱陶しくなる。

しかし、リリから体を離れたあと、僕はリリのこと鬱陶しくなるばかりか、激しい後悔をした。

僕はテーブルの上に置かれた冷めたコーヒーを飲んだ。一度口をつけ、次に一気に飲み干した。コーヒーは苦く、泥のような味がした。

リリは乱れた髪の毛を手ぐしでとかし、散らばった下着を集め、ゆつくりとした動作で身につけ始めた。それを見た僕ももそもそと服を着始めた。

電気をつけ、時計を見るともう12時を回っていた。

「そろそろ帰るね。終電だから」

リリが言った。

「終電あるの？」

「うん、あと10分だけだ」

リリは最寄駅の終電が何時に出るのかを知っていた。

僕はまだぼんやりとして現実味のない頭を無理やり起こし、自転車を引きながらリリを駅まで見送った。

見送る途中、会話はなかった。脇を通り抜けていく車のエンジン音が、さみしそうに路地に響き、消えかけた街灯の光をより一層貧しいものにしていった。

駅に着くとリリは

「さようなら」

と言って改札をくぐっていった。リリは振り返らなかった。

僕はただその後ろ姿をぼんやりとながめていた。

僕は帰りにコンビニに寄った。

別に何も買う必要があるものはなかったけれど、無性に人と会話をしたかった。

僕はガムとチョコレートを一とつずつ買った。

「225円になります」

と愛想の悪い店員の男は言った。

僕はおつりが出ないように払い、

「ありがとうございます」

と言って、コンビニを出た。

どうということもないこと作業だったにもかかわらず、僕はそれで少し落ち着くことができた。

部屋に帰ってぐしゃぐしゃになったベッドや、そのわきに落ちているティッシュボックスを見た。

僕はコンビニのビニール袋を床に投げ出し、ベッドに崩れ落ちるようにして倒れこんだ。

『感情が、薄れてきている』

そう思った。

僕は、買ってきたガムを三日間で食べ終え、

それからリリは2週間に1度か2度くらいの頻度で、僕の部屋に来るようになった。

9 話目・ニコという女の子

話は変わる。すこし過去の話だ。

上京してきた時、僕には彼女がいた。

ニコというショートカットの似合う活発な女の子で、テトリスと道を横切る野良猫が何よりも好きだった。

高校の同級生だった彼女は、僕と同じように東京の大学に入学するために上京し、僕のアパートとは駅2つ分はなれた駅近くで一人暮らしを始めた。

まだ慣れない東京で右も左もわからない僕たちは、一緒に暮らすということまで考えるほどの余裕がなかった。

僕とニコはとりあえず「ときどきお互いの家に泊まりに行く」という約束をし、まずは東京の生活に慣れようと一生懸命家事をこなした。

僕とニコは大学が違った。

2人の大学生生活は思ったよりも忙しく、一緒に過ごす時間は減った。
時間割はすれ違いばかりで、お互い始めたサークルやアルバイトも、一緒の時間を減らす要因になった。

それでもニコはバイトやサークルの合間をぬって、月に一度くらいの割合で僕の家に来た。

ニコは僕の部屋にきてくつろぐと、ぺたぺたとした歩き方をするのがくせだった。

あきらかにサイズの合っていないだぶだぶのパジャマ姿で、ペンギンのようにぺたぺた歩くニコの姿はかわいらしかった。

しかし、そのたびに僕は下の部屋に住んでいる住人から「足音がうるさい」と苦情を言われはしないかとおびえなくてはならなかった。

ニコは合間をぬって僕の家に来てくれたが、僕は結局一度しかニコの家に行くことはなかった。

来てくれるのであれば、わざわざ行くのが億劫に感じてしまうようになったのだ。

翌日の時間割やバイトのシフトを考えて、行く気がなくなってしまったこともあった。

つまり僕は甘えていた。

サークルやアルバイトは想像以上に面白く、生活のリズムから着る洋服まで高校時代とはまるで変わったものになった。

あらゆるものが僕と変えた。

そして古いものを僕はほとんど身の回りから消えていった。もしかしたら僕自身が意識的に自分の中から消していったのかもしれない。

夏が来て、降り注ぐ日光がTシャツの背中を汗で湿らす頃には、僕の周りは一変し、高校時代の面影はほとんど見られなくなった。

そして、僕とニコは別れた。

テーブルの上に置きっぱなしにしたコーラに浮いた氷が誰も気づかれぬまま溶けていくように、ニコの心は僕から離れていった。

ニコがとてもおしゃれな女の子になっていることに気づいたのは、僕が別れ話を切り出された時だった。そして僕は、吸いかけのタバコの灰が落ちるまで、動くことができなかった。

ニコが僕と別れる決心した日、僕は大学で同じ学科の友人とたばこを吸い、ビールを飲みながら、卑猥な会話で盛り上がっていた。

それから僕は、どうでもいい二人の女の子と気のないセックスをし、
リリを抱くようになったから、ニコのことを時々思い出す。

10 話目：技術と羞恥心

「セックスは技術だよ」

と、僕に向かって言い放った友達がいた。
高井と言う。

その言葉が、本当に真実なのかもしれないと、僕はリリを抱き始めてから本気で思うことが幾度もあった。

セックスの回数を重ねることに、どんどんその行為は激しくなっていた。

何度も何度も体を入れ替え、そんな格好したこともないという形に体を変え、翌日からだが動かなくなるくらい激しく動いた。

ニコが相手であれば、とてもできなかったようなセックスを僕はいくつも経験した。

リリは無言で僕に次の動きを指し示してくれる。

体全身の自然な動きで僕を次の行為に導き、その導かれた先にはいつも僕の今まで知らないセックスがあった。

リリの体の動かし方は、僕にとってダンスやフィギアスケートの選手の演技より美しいもので、言うなら、僕はそのセックスの唯一の観戦者であり競技者だった。

セックスはお互いの気持ち次第、などというのは真剣にきれいごと
と思えた。

セックスなしでも付き合える。

そんなことを考えてしまいうくらい僕はもうすでに純粹ではなかった
けれど、それでもお互いの気持ちが好き合っていれば、体の相性な
どは何とでもなると考えってしまった自分がいることを強く恥
じるようになった。

僕とリリのセックスからはどんどん感情が薄れ、僕は自分の技術を
向上させるためだけに熱中した。

その技術の先にいたのは僕のまだ知らない将来付き合つてあるう女
の子で、リリではなかった。

僕の中から何かが芽生え、何かがバースデーケーキに乗つたらうそ
くの火が吹き消されるように消えた。

そんなぼくを見て、「セックスは技術だよ」と言い放つた高井とい
う友人は、神妙な面持ちでうなずいた。
そしてぽつりと小さな声で、

「セックスが技術なら、愛は恥だね」

と言った。

僕はその言葉の意味がわからなかった。

11 話目：密封された関係

僕とリリの関係を知る人間は僕とリリの二人以外には一人もいない。だからそれは、密封された関係ともいえる。

タッパーで密封された夏野菜が長持ちするように、僕とリリも狂ったような暑夏のなか、クーラーの利いた部屋の中で飽きもせずセックスをし続けた。

リリはいつもまにか僕の部屋に泊まるようになり、連休でもあれば二泊することもあった。

僕とリリは目が覚めてから、夜寝るまでの間。それこそ部屋を一步も出ることなく、セックスをし続けた。

ベッドの上だけではなく、床や狭いキッチン。時には玄関ですらセックスをした。

女の子より、男の方がその点持久力はない。

その日の夕方にもなると、僕はリリの激しい動きに任せ、無理やりどうにかセックスをするという状態だった。

眠りにつく頃には僕の体からはなににもかもが搾り取られ、翌日はおもむろに脱ぎ捨てられた昆虫の抜け殻のように打ち捨てられる。

セックスと比べると、僕らの会話はいたって簡素なものだった。

さすがに僕のたどたどしい敬語はすでにどこかへ消え失せてしまったが、はたから見れば僕とリリの会話はどう見ても少し心を許した程度のクラスの友人同士のような会話だった。

時々冷静になると、その会話がひどく滑稽に思えることすらあった。

そういえば、リリが今までどんな恋愛をしてきたのか、僕は何も知らなかった。

それはリリにしても同じことで、僕がどんな恋愛をしてきたのかは全く知らない。僕の出身地がどこかも、知っているかどうかあやしいものだ。

僕はリリとの関係を一人の友人に明かした。

あの「セックスは技術だよ」と、僕に向かって言い放った友人だ。

彼の名前は高井という。

「セックスがうまくなりたい。なんで？」

高井は、僕の話聞き終えて、そう僕に尋ねた。

僕は、

「これから付き合う女の子のことを考えて」

と、言った。

すると高井は、目をふせて小さな声でいった。

「嘘だね」

僕は、まだその言葉の意味がわからなかった。

12話目：モカフレンドにみる再会

神様のいたずらという言葉があるのなら、僕はきつとそれを信じるだろう。

そして神様に激しい憎悪を抱く。

僕はその日、偶然ニコと出会った。

僕は街に出て買い物しようとして、電車に乗っていた。車内広告をなんともなしに目で追う。センスの悪い女性週刊誌の車内広告も、電車に乗っている間の時間つぶしには役立った。

僕には無意識のうちに乾燥した指の先をこするくせがあるようで、そのときも気づいたら親指の爪のわきがささくれ立ち、血が薄くにじんんでいた。僕は周りを少し見渡し、誰も僕を見ていないことを確認すると、血をぺろっとなめた。

十分ほどすると、目的の駅に着く。終着駅のその駅は東京都下では有数の繁華街で、僕は週に一度ほどはこの街にコーヒーを飲みに来る。

ニコと再会したのは、そんなありきたりな習慣の中の、気を抜けばふっと忘れてしまうような日のことだった。

駅のホームで電車を降りると、ニコとぶつかった。

驚きも何もない。

あまりに突然な出来事は、限りなく普遍的なことと同じ反応しか示せない。

お互いに状況がのみ込めるまで、少しの間の時間がかかり、ようやく事態を認識すると、二人はお互いに大きく目を見開いた。

考えてみれば、僕とニコの家は駅二つ分の距離しかはなれていない。まして方向は違えど同じ電車を使っているのだから、こうやって出会っても全く奇妙なことではなかった。

そもそも、人生は偶然の積み重ねであることに違いはない。

僕とニコのおよそ一年ぶりの再会だった。

一年は僕にとってそれなりに長い時間で、僕はその間にいくつものことを学び、多くのことを無くした。

ニコはどうなのだろうとは思わなかった。

僕はなぜか急に僕自身が情けなくなり、ニコに対して、とてもいたたまれない気持ちになった。

ニコの中には一年前の僕が残っている。きっと僕はその自分自身と今の自分とが比較されることが、この上ない恐怖に感じたのだ。

僕は既に、ニコと付き合っていたころの僕ではない。
僕は人間として、あのころの価値の半分も残っていない。人格も自分で自分を見るに堪えないほどに歪んでしまっていた。

ニコとの再会は僕にそのことを痛烈さとともに現実に思い知らせるものだった。

「どっしたの？」

いつのまにか下を向いていた僕にニコが話しかけた。僕はふと目を上げる。

ニコはまたきれいになったかもしれない。
落ち着いた服装をしているリリとは違い、ニコには周りを明るくするような明るさがあった。

そのあと僕らはチェーンのコーヒーショップに行くことになった。

僕はそのことを後ではげしく後悔した。

コーヒーショップに入って僕はどんな顔をし、どんな話をしたのだろうか。

内容はよく思い出せない。

僕にはニコの笑顔がやけに他人じみて見えたのを覚えている。

唯一思い出せる会話は

僕が無意識のうちにニコに対して注文を聞く時、

「モカブレンド？」

と聞いたことだ。

ニコは笑って、

「よく私の好み覚えてたね。うん、それ」

と言った。

でも、それだけだ。

今の僕には、もうニコをひきつけるものは何もない。

そのことだけが僕の中でコーヒーカップの底の汚れみたいに残った。

13 話目：シャワールームの痛み

ニコは別れる時に、

「またね」

と笑顔で言った。

僕も一生懸命笑顔を作り

「うん、またね」

と言ったが、はたして笑えていたかどうか。

僕はやるうとしていた用事（たしか買い物だったはずだ）も忘れて、とぼとぼと家に帰った。

残った感情は虚しさだけだった。

ニコと会うことにより、僕は僕自身が色あせているというところを改めて実感した。

僕がニコと別れてから一年。その間に学んだこと。

それはもしかしたらセックスの技術だけかもしれない。

悲しいことに、それは僕が唯一否定されたくないところであり、僕がこの一年で追い求め続けたものだ。

みじめだ。

僕は思った。そして気づいた。

僕はリリではない将来付き合う女の子のためにセックスの技術を向上させようとしているつもりだった。

でもそれは違う。

僕はニコを見返すためにセックスの技術を向上させたかったのかもしれない。

もっと言うのなら

僕はニコと別れたことに、別の言い訳を作りたかっただけなのかもしれない。

僕は部屋に帰るとシャワーを浴びた。気持ち悪い汗を流したかったのだ。もっと言つのなら、自分にまとりついた無為な一年間を流し捨てたかったのかもしれない。

僕は、シャワーを浴びながら

くだらない。

と思った。

そしてこぶしを作り、シャワールームの壁を思い切り殴った。

痛い。

痛みはむなしさしかうまなかった。

リリはそんな時、髪もまだ乾いていない僕のところへ、やってきた。

14 話目：部屋に降る雨

リリはいつもと同じように、控え目な笑顔をして僕の部屋に入ってきた。

入ってくるなり、シャワーで髪の毛濡れていた僕を見て、

「部屋の中で雨が降ったの？」

と言った。

僕はなんとなく不愉快になり、黙って髪の毛をタオルで拭き続けていた。

「コーヒー飲んでいい？」

とリリが聞いた。

僕は「どうぞ」とだけ言って、戸棚のインスタントコーヒーを指差した。

リリはいつものようにコーヒーを作り始めた。

僕は、リリがコーヒーを入れている間、ベッドに腰掛けてぼんやりと髪を拭き続けていた。

リリはコーヒーを入れ終わると、隣に腰かけた。そして僕に片方のコーヒーを渡し、僕の頬にそっとキスをした。

僕は身動きもせずにいる。
いつもと様子の違う僕に不審に思ったのか、リリは首をかしげながら僕の顔を覗き込んだ。

「どうかした？」

「いや、別に」

僕がそう言うと、リリはもう一度僕の頬にそつとキスをした。
そして持っていたコーヒーカップをテーブルに置き、体を僕に巻きつけた。

僕は、またコーヒーが無駄になったと、少し思った。

リリは僕の肩の肉を軽くくわえた。そしてやさしく唇を開けたり閉じたりしながらだんだんと僕の首へと唇を動かしていく。

静かだった。

時計の針の音が聞こえてしまうほど、部屋には物音がしなかった。
その無音が僕を無意識に動かした。

リリの唇が僕の唇へと移りかけた時、僕は思わずリリのことを振り

払った。

リリはしばらくの間、僕の様子をうかがっていたが、数分たっても僕が何も言わないでいると、黙って僕の来ていたシャツのボタンをはずし始めた。

「私たち、お互いのこと何も知らないんだよね」

リリが突然言った。

僕は驚いてリリのほうを見つめた。リリは僕とは目を合わせないで、ボタンをはずし続けていた。

「でも、聞かない。それがルールだから」

リリはそう言い、気づくと僕のシャツはベッドにひらりと落ちていた。

15話目：世界の終り

リリは僕の乳首をゆっくりと吸った。

「ルール？」

僕は胸の快感を無理やり押さえて聞いた。

リリは、顔を僕の胸にうずめたままうなずいた。頭の中にはいつい時間ほど前まで一緒にいたニコの顔が思い出される。

僕は自分の想像を打ち消すように、僕の胸にうずまるリリの顔をひき離れた。

「ルールって何？」

僕はもう一度そう聞いた。

「お互いの」

リリが何か言おうとしたその唇に、僕は思いきり強く自分の唇を重ねた。

リリが言おうとしていたこと、それを僕は分っていた。

当たり前のことだ。今まで確認したことはなかったけれど、僕が高井に言い続け、僕自身に言い訳として語り続けていたことだ。

舌が深く絡み合う。リリは何度か僕の問いかけに答えようとしたが、僕は唇を離さなかった。

ゆっくりと舌をリリの口の中で回す。

上唇から舌な周りを囲うようにまわし、下唇まで。

リリはしばらくすると、おとなしく僕の舌の動きに合わせて自分の舌を動かすようになった。

僕はおとなしくなったリリの様子を見て、リリの唇から自分の唇を離す。

僕とリリの目が合った。

リリは、悲しそうな目をしていた。

僕はその目にひるんだ。

僕はリリのその瞳をみて、言おうとしていたことを忘れてしまった。

リリはひるんで何も言えない僕に向かって、

「私たちの関係はこれだけ」

と言った。

テーブルの上のコーヒーはすでに湯気を発していない。

僕は何も答えられずに、ただまっすぐとリリの目を見つめていた。

「セックスでつながって、心ではつながってないの」

リリは、再びさみしそうな顔をして言った。

そう、僕らはセックスでしかつながっていない。

だからたとえ僕になにが起こってもそれは僕の中だけの問題だ。

僕の話はリリには何も関係のないことだし、もしそこに関係を望んだら、需要と供給のバランスは崩れ、世界は終わる。

僕は初めて気付いたと言っている。

そう、無感情なセックスの悲しさに。

16話目：わだかまり

結局、僕は逃げた。

いつもより激しいセックスをして何も考えようとしなかった。

リリはいつもより激しく突かれているにもかかわらず、いつもより余裕のある様子だった。

僕はセックスの途中で何度も抱いているのがリリではないような錯覚に陥った。

セックスが終わっても、僕とリリは何も話さず、リリは無造作に下着を身につけ、服を着るとそのまま電車で帰っていった。

僕には乾いていないシャツを着ているような後味の悪いわだかまりだけ残った。

僕は高井にそのことを話した。

「リリ…だっけ？その女の子のことはどう思っているの？」

と、当然聞かれた。
僕は首を振って

「好きではないよ」

と答えたが、自分でもその言葉に自信はなかった。

僕の物語の中には「好き」という言葉は出てこない。今まででもそうだったように、おそらくこれから出てくることもない。

高井はため息をついてタバコを大きく一吸いし、

「じゃあ何も考えることなんてないじゃないか」

と興味をなくしたように言った。

かみくせのある高井のタバコのチャコールフィルターはすでにぼろぼろになっていた。

「こんなことばかりしている気がするよ」

僕はぽつりと言った。

「こんなこと？」

「好きではない女の子を傷つけるようなこと」

高井は僕の話に興味なさそうに聞いていたが、僕がそう言つと僕のほづをきりつとにらみ、

「本当にそう思っているわけ？」

と、急に怒気を含んだ声で言った。

「お前は」

高井はぼくをにらみつけながら言った。

「彼女たちに傷どころか、何も与えてないよ」

17話目：苦いコーヒー

ふう、と僕はため息をついた。

リリと会わない日々がひと月ほど流れた。僕はその間の日々をそれなりに後悔し、そして情けないほどに悶々として過ごした。

とくにすることがないと、僕は何度も無意味に近くの繁華街まで足をのばし、コーヒーを飲みに行った。

いつもきまったコーヒーショップに行き、いつもきまった席に座った。

二階の窓側の席で、眼の下を人通りの盛んな通りが横切っている。僕はたいしてうまくもない苦いコーヒーを飲みながら、たいていは眼下を眺めながらぼうつとしていることが多かった。

リリと男の人が二人で歩いているところに僕が出会ったのは、普段だったらその日何をしたのかも思い出せないくらい何も特徴のない日だった。

僕はいつものようにコーヒーショップに向かって繁華街の裏道を歩いていた。

何も考えず、さして言うならば今日はいつもの席が空いているかな、とぼんやりと思っている時だった。

目の前から知った顔が歩いてくるかと思った。そしたらそれがリリだった。

しかも、リリは背の高い僕の知らない男と歩いていた。

二人は親密そうだった。リリは笑っている。

リリが笑っている？

にわかには信じられないことだった。

僕はうろたえた。

しかしよけるには不自然すぎる距離になっている。

僕は何もできないまま横をすれ違った。

リリは瞳すら動かさずに僕の横をすれ違って行った。

僕は後ろを振り返らないまま突き当たりの道まで歩き続け、そこでしばらく啞然としていた。

僕の知らないところで物語は進んでいるのかもしれないと思った。

18話目…よじやく気づいたもの

時に僕は圧倒的に負けることがある。

高校時代までの僕なら、そういう時は決まって倒れるまで走り続けた。

部活中に近くの河川敷へロードワークに行き、そのままコンクリートブロックの上で倒れていたこともあった。

大学生になった僕は、酒とタバコを覚えた。
健康に悪い。

そしてやはりたちが悪くもある。

長さの均一でないタバコの吸い殻、点々とこぼれたビール、食べかけのピザ。テーブルの上に散らばるそれらのものが、アルコールで空転する僕の視界には所狭しと陣取り合戦のようにせめぎ合っているように思われた。

やがて僕はこのまま寝てしまふのだろう。そうぼんやりと思った。

時々視界の隅にうつる洗濯物は山になっており、カレンダーの日付はどうやら先月のままのようだった。

しかしそんなことはどうでもいい。

視点が迷惑そうな顔をしている高井に一瞬定まり、またぼやけた。

高井には迷惑をかけている。

自分が情けない。

「負けた」

僕が言う。

「誰に？」

高井が興味などまるでないように聞く。

「もちろんリリにだよ」

「そんなものに勝ち負けなんてないよ」

僕には高井の言うことがきれいごとにししか聞こえない。

タバコに火をつける。ライターを握る僕の手は小刻みに震え、うまく着火させることができない。

ようやくひと吸いすることができた。

吐き出された煙はさまざまように部屋の天井に向かって漂い、やがて行き着く場がなくなると、諦めたように消滅していった。

人は怖い。

つながることによって何かが生まれてしまう。

無感情なはずだったのに。ただセックスをするというだけの関係の
はずだったのに。

ここにはリリのことを強く想っている自分がいた。

19 話目：ポテトチップス

忘れない。

女の子のことを本気で忘れたと思ったことなど今まで一度もなかった。

僕は溺れていたのだ。リリに。

いつのまにか僕はどうしようもないほどにリリを想うようになった。

そのことに気づいたのは、嫉妬からだ。

リリと男が歩いている場面を見ることによって、僕はようやく気付いた。

僕はリリよりも優位に立っているのかと思っていた。

とんでもない。

僕の脳裏に高井の無感情な声が浮かぶ。

「お前は彼女に何も与えていないよ」

僕はリリに何も与えていない。

それでもリリは、僕にいつの間にか取り返せないほど切ないものを与えた。

その確固とした現実。

僕は何もしないままベッドに横たわっていると、見えないその現実
に押しつぶされそうになった。僕はもがき、息も絶え絶えになりな
がらかけ布団をはいだ。

ふらつく足取りで洗面台に行つて自分の顔を見た。
頬には汗が滴り、目のまわりにはくまができている。

「ひどい顔だ」

僕は一人つぶやく。

いつまでもこんな状況が続くのか。僕は自問自答する。
いや、耐えられない。自分のどこからそう返答が返る。

薄暗い洗面所から部屋の中を振り返る。ビールの空き缶が数本放置
され、開いたポテトチップスの袋の上にはまだ半分以上ポテトチッ
プスが残っていた。
ベッドの掛け布団が落ちている。鼻をかんだ後のティッシュペーパー
のようにくしゃくしゃになっている。

「決めた」

僕は両手に水をできるだけ貯め、それで顔を洗った。
僕はベッドの枕もとに無造作に置いてあつた携帯電話を手に取り、
ダイヤルを押す。

コールが無限にも感じる。

「もしもし」

リリの弱弱しい声が携帯電話越しに僕の耳へ響く。

変わらない。

僕はリリのいつもと変わらない声に少し安堵した。

僕は精一杯強がりながら、言った。

「会いたい」

20 話目：新しい登場人物

僕のいつもくるコーヒーショップ。

土曜日の昼の店内は、いつも以上に人が多い。コーヒーとパンの乗ったトレイをもった客は空いている席を見つけるなり、まるで小学生の時にやった椅子取りゲームのように席をとる。周りに座る客のことなど気遣うこともない。

僕の目の前にはリリがいる。

陽のあたるところで話をするのは久しぶりだった。どことなく陰気な印象を持つ僕とリリの二人の会話には、昼のコーヒーショップは不釣り合いだった。

そしてリリの隣には一人の男が座っている。この間リリと二人で歩いていた男だ。

名前は水口さんというらしい。さっき男が名乗った。

僕はなぜ今このような状況になっているのか、よく呑み込めていない。

「じゃあ、鴨下君は僕の三つ下になるんだね」

水口さんが笑顔で言う。

僕は少し困惑しながらも「はい、まあ」と言った。笑顔のまぶしい人だと思った。

まぶしすぎる、とも思った。

水口さんは僕にいろいろな質問をする。大学のこと、高校時代のこと、サークルのことからお酒を飲む頻度まで、すらすらと流れるように会話がつながっていく。

リリに話を振る時もある。リリは少し恥ずかしそうに、しかし微笑みながら受け応えをしている。

水口さんは大きな声で笑い、。大きなしぐさで驚きを表す。

あまりに面白そうに笑うから、僕とリリもつられて笑ってしまう。話し方の独特なテンポも僕らを引き込んでいく。

「本当に？」や「いやあゝそんなことないでしょう？」と大きな目で、真剣に聞きこむ姿は、僕にはまぶしい。

人には、場を作れる人とそうでない人。

お互いの間柄も知らない「無」の状態から、その場の雰囲気を作るというのは、僕にとっては億劫でしかない。

水口さんと僕の違いはその創造性だ。

彼は空気を作れる。

なぜ水口さんはリリと親しくなったんだろう。

僕の頭の中ではそのことだけが何度もめぐる。

なぜ水口さんが、リリなんか。

そう思ってしまう自分がいる。
それはある種の嫉妬だ。

水口さんに僕はかなわないと思った。
かなわない距離にいる水口さんだったら、僕のかなわない距離にいる女の人と付き合ってほしい。
そう思った。

もはや嫉妬とはエゴを通り越した醜さをもつ。

21 話目：パンケーキ

真夏の太陽が僕たちを照らしつける。いや、焼き付けると言ったほうがいいのかもしれない。

太陽はきつと僕ら人間のことなど、ホットプレートの上のパンケーキほどにしか思っていないに違いない。

それでも水口さんは街の中のできるだけ日の当たらないルートをさりげなく選びながら、歩いている。そこでも僕との差が垣間見える。僕にはそこまでの優しさなどない。

水口さんとリリ、そしてそれに金魚のフンのようにつき従う僕。まわりから僕らを見るとどのように見えるのだろうかと思つた。そしてすぐに思い直す。

自分だつてわからないのに、わかるはずがない、と。

町の喧騒を夏の暑さがさらに混沌としたものとしている。

僕らは狂つたように笑っている服より肌の方が多く見える女の子たちの横を通り抜け、着衣水泳してきたのかとも思えるほどに汗をかいた年齢不詳のメガネ男のいる角を少し避けるようにして曲つた。

「二人は付き合ってるんですか？」

僕は口に出して聞いた。

唐突に聞いた僕に対し、水口さんは少し間をおいてから答えた。

もしかしたら間などなかったのかもしれない。

しかし僕にはそれが長い間に感じたのは、どういつことなのだろうか。

その答えは、今の僕には残酷すぎた。

「そうだよ」

水口さんは言った。少し笑っていたかもしれない。

「そんなんですか、そうだと思います」

僕はそう言った。

そうなんですか。そうだと思います。

22話目：どうでもいい女の子

僕は久しぶりにセックスをした。

どうでもいい女の子だ。

大学の同じ学科の女の子で、メールをしているうちに一緒に食事をして行くこととなり、甘い酒を無理して飲むと、思い出したようにホテルへ行った。

久しぶりだったから気付かなかったが、少し前までの僕はいつもそうだったと思い出した。

僕がリリに溺れる前は、いつもこうして無感情に女の子を抱いていたのだ。

それでも、無感情な感情を優しい言葉と表情で覆いながら、平然と

「ホテルへ行こうか」

と言う僕自身には、我ながら身の毛がよだつような思いがした。

僕はやはりこういう人間であるということとはもう避けられない現実なのだということを改めて思い知った。

リリへの思いも、結局僕を変えることは何もなかったと思うと、と

てつもなく僕はせつない気持ちになった。

僕がその日抱いた女の子は、黒く長い髪が印象的な子で、まるでシヤンプーのコマーシャルに出てきそうなさらさらとした髪を時々わずらわしそうに耳の後ろへ流す癖があった。

出会ったときから僕に好意的でいてくれた女の子で、僕はわりとすんなりとその女の子を抱くことができた。

彼女に最初その気はなかったのかもしれない。

それでも彼女は僕の誘いに、少し迷いながらもうんいいよと首を縦に振った。

お酒を飲んでいなければ、結果は変わったかもしれないが、僕にとってそんなことはどうでもいい。

その女の子は髪を後ろに流すしぐさがとてもセクシーで、僕はそれだけで彼女のことを好きになった。

黒とエメラルドグリーンの珍しい色の下着が、とてもよく似合っていた。

しかし、それでもやはりどうでもいい女の子に違いはない。

好きになるということは僕にとって、抱けるか抱けないかの境界線でしかない。

23 話目：セックスの個性

あたりまえのことだけれども、女の子はひとりひとりにセックスの個性がある。

その個性が前に抱かれた男によるものか、それともその女の子本来のものなのか、僕にはわからなかったが（おそらくはそのどちらものだろうけれど）、その女の子ひとりひとりのセックスの個性というものは、えてして面倒なものだ。

キスの仕方から、愛撫の方法、セックスのあとの仕草まで、まったく異なるそれらの個性は、相手に合わせようとすればするほど億劫な作業にしか感じられなくなる。

僕は真剣に思ったことがある。

「今この女の子と別れたら、またいちからセックスを作らなくちゃならないのか」

と。

「だったら、もうすこし付き合っか」

と。

僕は髪の毛黒くてまっすぐで長い女の子を抱きながら、そんなことをぼんやりと思い出していた。

どことなくぎこちない体づかいをする女の子だったけれども、それはあるいはただのセックスの個性なのかもしれない。

僕はリリとのセックスとあまりに違うそのセックスに、何度か少し気を引きかけたが、それでもなにかしらのことを考えながらいつのまにかセックスを終えていた。

好きになれさえすれば、僕は女の子を抱けるのだ。

かといって僕は処女の女の子を抱けるわけではない。

言い換えれば、それができるほど僕はまだ腐っていないということなのかもしれない。

怖いのは責任だ。

だからゴムは必ずつける。

そして盗塁を狙う野球選手のように、いつもリードを大きく取りながら逃げれる姿勢をとっている。

もちろん時々逃げ出すことが遅れることもある。

24 話目：好かれる不幸

好きでもない女の子に好かれること。それは、不幸だ。

好かれた時点で好かれたものは悪者になり、好いた相手には同情者が生まれる。

無論、その段階ではすでに好かれてしまったものにできることなどもう何も無い。

だから、好かれることは不幸だ。

もちろんこの考え方には、好かれるものの人間性は一寸も考慮されていない。

なぜなら、考慮すれば僕の場合、好かれるものが悪者となることになんら不思議を感じる必要がなくなってしまうからだ。

だからというほどではないけれど、僕は自分から好きになった女の子としか付き合ったことがない。

僕のことを好きになる女の子は哀れだ。

何を思っ僕を好きになるのか理解ができない。

傷つけることがたとえ分かっている、好かれたらもうしょうがない。

僕は逃げることしかできない。

女の子の気持ちという霧の向こうの得体のしれない大きなもののようなものからの逃避行は、時効がないだけに、それなりの苦難を強いられるものだ。

もはや今では自分でもよくわからないほどのものから僕は逃げ続けている。

時々、なにから逃げているのかすらわからなくなることもある。もしかしたら逃げている理由なんてないのかもしれない。

それでも僕が逃げ続けなくてはならないのは、何もしないということとは誤解を生ずるということだからだ。

誤解を与えるのは罪だ。

「誤解は世界をも滅ぼす」

僕は、誰もいない僕の部屋でひとりそう口に出して呟いてみたことがある。

しかし、僕はすぐにそのことに後悔した。

それは想像以上に恐ろしいことだと気づいたからだ。

それから二度と僕はそうつぶやいたことはないし、これからも二度とそうつぶやくことはないだろう。

25話目：最後に笑ったのいつですか

友人の高井はそんな僕の恋愛歴をほとんど知っている。

いや、すべてを知っていると断言している。

僕が初めて抱いた女の子からニコヤリリはもちろん、もう顔さえ思い出せないような一晩だけの関係だった女の子まで、僕が今まで生きてきた中で関係のあった女の子のことはすべて知っている。

それは僕が毎回そのひとつずつの関係について、神経質な警備員が内容のない巡回日誌を書くように、高井に対して語りつづけてきたからだ。

きっと僕は、自分の恋愛を自分の中だけではうまく処理していくことができなかったのだろう。

もし僕の周りに高井のように丹念に語りつくせる相手がいなかったら、あるいは僕は今頃錯乱していたかもしれない。

高井は僕の話の話を聞いている時、そのたいていは目を小さく細めて退屈そうな表情をしている。
一言も口をきかないこともあれば、ふと僕が気づくといびきをかいて寝てしまっていた時もあった。

しかしそれでも高井は僕のことを、僕の話した内容以上に理解していたし、僕は高井に話すという行為それ自体で自分のことを以前よりよく理解できることもあった。

高井は僕の前では多くを語らない。

しかしそれでもときどき僕は高井の一言に、立てなくなるほど傷つき、目の前が真っ暗になるようほど絶望することがある。

「最近、心の底から笑ったことある？」

その日の高井は僕にそう言った。

僕は言われるがままにその日数を数え始めた。

しかし結局、僕は僕が最後に笑った出来事を思い出すことはできなかった。

その事実は僕に少なからざるの衝撃を与え、その衝撃は、僕が最後に笑った出来事がいつなのかと記憶をめぐらせればめぐらせるほど増していった。

高井は相変わらずけろっとした顔をしながらそう言ったけれど、はたして高井にとってはその質問はどのような意味を持つのだろうか。

僕は高井が心の底から笑ったところを見たことがない。

そういえば、リリが心の底から笑ったところも見ることがない。

そう、僕の周りには心の底からの笑いが無い。

そう考えたら、僕の目の前が真っ暗になった。

26 話目：高井のこと

高井は僕の知る限り、ずっと人気者だった。

高井の周りには自然と人が集まり、その集まった人が何かを起こし、その起こった何かによってまた人が集まった。

たしかあれば、高校の卒業式のことだ。

僕はクリーニングから帰ってきたばかりの折り目のしっかりついた制服を着ていた。

紺色のブレザーの袖さきは相変わらずほころびていたが、気付いたら付いていたズボンのしみはちゃんと落ちていたし、いつもはだらしなく結んでいるストライプ柄のネクタイも、その日に限ってはきつちりと締めていた。

春日が鋭く差し込んでいる昇降口から校庭にかけての犬走りは、式典を終えて出てきた卒業生によってごった返していた。

在校生も多く、あちこちからデジカメのフラッシュが上がり、トーンの高い笑い声が聞こえ、そこかしこに涙を流している女の子も見えた。

みんながみんな最後の高校生活日を狂ったように充足させようとしていたのだ。

高井はそんな中、僕とは少し離れた所にいた。

何人かの輪の中に立ち、無表情に校舎を眺めていた。

後輩と話をしていた僕が高井の姿を見つけ、高井のいるグループに向かつて歩き始めた時だった。

高井が今は誰もいないはずの校舎へ向かって急に、

「お前ら、勝ったと思うなよお」

と大声で叫んだ。

僕は思わず足を止めてしまったし、意味のわからないことを叫ぶ高井の周りにいたクラスメートたちも、啞然としていた。

しかし、どこかで笑い声が起ったと思ったなら誰かも高井と同じように

「勝ったと思うなよお」

と叫んだ。

すると堰を切ったようにみんなも思い思いのことを叫びはじめた。その奇妙な光景は、僕らのクラスメートから、学年全体にも伝染した。

涙の交じった声もあった。卒業証書片手に数十人、あるいはそれ以上の学生が叫ぶ姿は圧巻だった。

高井はそんな男だ。

27話目：パラレルパーソン

そんな高井と僕が出会ったのは、たしか高校一年の夏だったと思う。詳しいことは覚えていない。

気づいたら近くのハンバーガーショップで安いコーヒーをまずそうにすすりながらタバコをふかして語り合っていた。

僕がカラオケボックスで女の子を初めて抱いたのもちょうどその頃のことだった。

その翌日、気持ち悪いほどにすがすがしい顔をして登校した僕を高井がただつまらなそうに見つめたのが印象的だった。

高井が初めて女の子を抱いたのはそれよりもずいぶん前の話で、高井が12か13の頃のように思える。あるいはもつと前かもしれない。

かもしれないというのは、その詳しいことを僕は高井から直接聞いたことがないからで、話をまとめてあくまで推測からそう言っているにすぎないからだ。

ただ、僕はその相手の女の子を知っている。

高井の幼馴染で、ユウという女の子だ。細身で長身の整った顔立ちをしている高井とよく雰囲気のある女の子で、何度か話をしたことがあった。

二人の母親が仲がよく、家も近いために二人は小さい頃からずっと一緒にいる。

つまり高井とユウは20年付き合っているのだ。

僕にはそのことがにわかになんか信じかねる。

だから僕はきつとこれから高井にユウのことを聞くことはないだろうし、高井は高井で僕なんかには話を打ちかけるようなことはない。

打ちかけられたら、僕の中の何かが壊れてしまふ気がするのには、口には出さない。

高井は僕がはじめて女の子を抱いたその時期くらいになると、誰が誰とセックスしたとか、どうセックスしたとか、僕らくらいの年代の男の子がなによりも熱心に話す内容にはもはや興味がなかったのかも知れない。

高井はそんな会話を片耳に聞きながら、毎日を辟易しながら過ごしていた。

辟易しつつも、僕と付き合い続けたのはきっと僕が高井とはあまりに違う生き物だったからかもしれない。

僕は結局いつまでたっても女の子をどう扱っていいかわからなかったし、自分が何で女の子を抱こうとするのか理解できなかった。自然、無意識に僕は多くの女の子と寝ることになり、その姿は高井から見ると、あるいは僕は薄暗い研究室の中で回し車の中を無意味に走り続けるハムスターのようなものだったかもしれない。

滑稽だ。

一方であまり人付き合いのうまくない僕が高井に打ち解けられたのは、僕が高井より優っているところが何一つなかったからだ。

でもおかげで僕は何のプライドも持たずに高井にたいして身の内をさらけだすことができ、少なからずのことで救われてきた。

僕は高井には何も与えられていないが、僕は高井という存在を通して自分を見つめてきた。

多少の誇大表現があっただとしても、僕と高井はこういう関係だ。

28 話目：拝啓リリ様

一人暮らしは時にとめどないほどにさみしい。

僕は上京して一人暮らしをはじめてから、そんなことを思う自分の意外な一面を見つけた。

それは、僕はどうやら無類のさみしがり屋らしい、ということだ。

このことはおそらく僕以外の人には「あ、そう」程度の話で、おもわず声を荒げて「それがどうした」と言い返したくなる程度の問題だと思う。

しかし、僕にとってこの事實は、長年の探し物が普段使っている枕の下から思わず出てきたかのように、ひどく新鮮で、かつひどく痛切な事実でもあった。

僕は自分自身のことを、人並以下しか感情の持てない冷めた性格の男だと思っていた。

言葉は悪いながらも、そういう自分の性格をどこか不思議と気に入っている自分がいて、今までも友達にはそういう風に一匹狼な自分を演じていることもあった。

それがどうしたとか、ひとりでスーパーで買い物をして誰もいない古びたアパートへ帰り、冷蔵庫に古くしなつた野菜をどかして無理やり買ってきたものを押し込んでみると、ふと涙が出てきそうな

ほどさみしさを感じている自分がいたのだ。

それだけではない。

何も予定のない休日の午前、調子の悪いトースターでバターロールを焼き、1・2コほおばった後に30分もすると、おもわず人が恋しいのか繁華街へ向けて自転車をこぎ出す自分もいた。

そのいてもたってもいられない感情は僕のそれまでの人生では全く縁のないものであったし、むしろ嫌悪していたものとすら言えた。

僕が女の子におぼれていったのは、ひとつにこの要因がある。

だからリリが僕の部屋を訪れなくなったとき、僕は無性にさみしくなり、他の女の子を求めるようになった。

ある意味これは言い訳だ。

リリのことをたとえ忘れられなくても、他の女の子を抱ける僕の心情は特別におかしいものではない。

人を恋することと、さみしさを紛らわせることとは違うのだ。

僕は、その言い訳を考えるのに1か月を要し、さらにその言い訳こそが僕の間違いだったと気付いたのは、もっとずっとずっとあとのことだった。

29 話目：2年が過ぎ、そして星が消える

2年の時が流れた。

その間に僕の周りでは特になにかということはおこらなかつた。

しかし、ただ

「2年の時が流れた」

と、ここにこうして書いてみるとやはり、さみしい。

なぜなら、その流れた日々は僕の人生から見ればほんのわずかも
しれない。

が、それらの日々が間違いなくもう二度とやってくることはない僕
の歩いてきた貴重な日々の一部に違いないのも事実だからだ。

ただ、もしかしたら特に何も起こらなかつたのはこの2年だけでは
ないのかもしれない。

しかしそれ以上考えることは恐ろしい。

やめた。

そう。

元来、僕の人生はそれほど劇的ではないだけの話だ。

さて

その過ぎ去った2年の間に僕は3人の女の子と寝た。

中にはそれなりに恋をした時期もあった。

「ハッピーエンドだね」

高井にそう言われた時は、僕も少し自分に自信を持った。半年前だ。

「そのうち、自然に、なるようになるんだ。きっと」

と、よくわからないことを言っていた高井の顔は少しうれしそうだった。僕はその笑顔をおそらく一生忘れない。

女の子と別れたのは2週間前、ちょうど僕の住む街が梅雨に入った日だった。

あじさいは梅雨の到来を喜んでいるようだった。
理由もなくあじさいにつられて少し陽気な気分になっていた僕は、
いつもと変わらないようにその女の子と待ち合わせをし、そしてい
つも以上に普通の気分で彼女を連れて街の中を歩いた。
雨のにおいが心地よく感じていた。

「ごめんなさい」

彼女がそう言ったのは、雨宿りによった裏通りのコーヒーショップ
に入った時だった。

「え」

僕は思わずそう言った。僕は飲みかけのコーヒーをテーブルに置い
た。中のコーヒーがちゃぷんと控え目に音を鳴らした。

彼女は別れたいと言った。

正直、意外だった。

そういう流れじゃないはずだ。

と、思った。僕はなるようになったはずなんだ。そう高井も言った

じゃないか。

しかし、心のどこかで

「またか」

と冷静に思った何かも感じた。

結局、コーヒーが冷めるまで僕は彼女を説得しようとしたが、彼女は首を縦には振らず、別れた理由さえ言ってくれなかった。

「私のせいだから」

と彼女は言った。それが嘘だとは分かっているながら、それ以上をなにも聞けなかった。

その時すでに、僕は彼女と胸を割って話す仲ではなくなっていたのだ。

恥ずかしいことに、僕はその時までそのことに気付いていなかった。

あれから2週間たった。

今、僕はそのことを望んでいなかった自分がいたことに気づいてい

る。

変わらない。

彼女に理由を言われなくても僕にはわかっていた。

幼い。もしかしたら僕という人間性の一部は壊れているのかもしれない。

僕は雨の中にたたずみ、再び自分に幻滅することになった。

悪いことは続く。

傘もささずに濡れて帰ったその日の夜、僕は風邪をひき、その2週間後、高井はこの地上から消えた。

30 話目：友人の死

高井は、すりつぶされた魚の肉の入った缶がぎゅーぎゅーに詰み込まれた大型トレーラーにはねられて死んだ。

居眠り運転だったらしい。大型トレーラーはそのまま道路脇の電柱に衝突して運転手は額にけがをし、高井はすりつぶされた魚のような姿になって死んだ。

おそらく、高井は自分が死んだという認識すらなかったに違いない。

その死体は海岸に打ち捨てられた船に住み着いていた野良犬がまず見つけ、人に発見されたのは数時間後、ただの交通事故だと思つて実況検分に来た警察官が現場を離れてタバコを吸いに行った時だった。

高井がはねられたのは僕や高井の住んでいる街からは電車で一時間以上かかる海岸線の国道で、今でもなぜ高井がそんなところにいたのかはわかっていない。

僕は高井がはねられたその日のその時間、近くのレンタルビデオショップで借りてきたアダルトビデオが流れている画面を、ぼんやりとした表情で見つめていた。

高井が死んだ事故は朝のテレビニュースで流れた。僕は高井の母親から連絡を受け、原付をとばして駆け付けた病院の待合室でそのニュースを見た。

髪の毛をくるくるに巻いたかわいい顔をした女子アナウンサーが、芸能ニュースを読み終え、急に神妙な顔になったかと思ったら、高井の死んだ事故のニュースを読み上げた。

「今朝、市の国道で東京都内の大学に通う学生、高井和彦さんが大型トレーラーにはねられて死亡しました。県警は大型トレーラーの運転手が居眠り運転をしていたとして業務上過失致死の疑いで逮捕しました。」

アナウンサーはそう読み終わると再び顔を笑顔に戻し、画面は占いランキングに変わった。

僕は肩にかけていたバッグをテレビに思い切り投げつけた。

31 話目：魚肉ソーセージ

高井が死んでからも、僕の生活は全く変わらなかった。

あえて挙げるとしたら、魚肉ソーセージを食べられなくなったことだけかもしれない。

「セックスの前にそういうこと言わないでくれる？」

ベッドの中の女の子は、そう言った。僕がその時付き合っていた（そのようなことを言い交わした覚えはないけれど）女の子だった。

確かに正論だった。

しかし無性に腹の立った僕は、その女の子の体をベッドから投げ出し、部屋のドアを大きな音を立てて閉めて飛び出してしまった。

枕もとに置き忘れたネックレスのことをすこし後悔もしたが、その女の子とはそれ以来連絡すらとっていない。

我ながら程度の低い生活をしているな、と思った。

本を読んでも、映画を見ても、その中に出てくる登場人物たちはもつと人間味あふれる生活をしていた。

それに引き替え僕はどうだ？

まるで雪の中で温泉につかる野生の猿とかわらないではないか。

寒ければ温かい温泉につかり、セックスをしたければ近くにいるメス猿と交尾をする。

そして残るのは無感情な感情だけ。

僕に物語があるとすれば、その結末はきっと幸せなものにはならない。

なぜなら僕は、この先もきつと成長するということはないであろうし、仮にその僕の姿を誰かが成長したと見間違えるようなことがあったとしても、間違いなくそれは本当の僕の姿ではない。

表面上を磨くことは簡単だ。

ただ、内面は磨くことではない。内面を磨くという自分を勘違いすることだ。

そんなことすらわからなくなったとき、僕は大人になったといえるのかもしれない。

32 話目：清算

流れて行った月日。しかしそれらを顧みる感情は、規定のイベントを一通り終えた後の文化祭実行委員とまるで変わらない。

その間に僕の周りからは多くの人が過ぎ去っていった。大学生活は気づくともう残り僅かになり、その残る日々を思うと同時に憂鬱さがまとうようになっていった。

また、その憂鬱さとともにやってくるのが大学1、2年の頃の歯がゆい思い出で、アルバムの中の茶色がかった古写真のように香ばしいにおいを僕の胸にまとわらせた。

その多くが、何人もの女の子たちとの思い出で、それと同時に顔を思い出せる女の子はリリしかいなくて僕は啞然とした。

高井とリリの顔は僕の想像の中に交互にあらわれ、口を開こうとしたとたん、ふっと消えていった。

二人が僕に向かって何を言わんとしているのか、残念ながら僕には想像することすらできなかった。

月日が僕を成長させたのかはわからないが、確実に大人へのステップを踏ませていた。
いつか高井が

「大人になることが成長するということではないよ」

と言っていたけれど、その言葉の裏にあったはずの大人への憎しみというものが確実に僕の中から薄れていきつつあることに、僕はおそれおののき、思わず片手につかんでいたビール缶を強く握りつぶした。

僕は大人になることによっていくつもの後悔を忘れていくのだろう
なと漠然と思っていた。

気づいたらまったく似合わないスーツで身をまとい、口もとのひき
つった笑顔で話し続ける日々。もしかしたらそれが幸せというもの
なのかもしれない、そんなことを僕は漠然と考えるようになってい
た。

しかしそうはいかない。

ある雨の降った冬の中の一日、僕はリリと再び出会うことになった。

清算。

僕の頭の中にその二文字が薄暗く光った。

32 話目：清算（後書き）

最近の連載ペースの遅さ、連続でお読みくださっている方がいれば誠に申し訳なく思います。

ぜひ感想等もいただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2814e/>

無感情とセックス

2010年11月23日02時54分発行